草のことづて

石牟礼道子

草のことづて

石牟礼道子

筑摩書房

草のことづて

一九七七年十二月二十日　初版第一刷発行

著者／石牟礼道子
発行者／岡山猛
発行所／株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京六―四一二三
郵便番号一〇一―九一
印刷／多田印刷　製本／積信堂
装画　秀島由己男

©石牟礼道子　一九七七

Printed in Japan　0095-81099-4604

草のことづて　目次

第一部

日記から　11
猫の家　21
本屋を知らずに育つ　28
お互いのやまい　30
死におくれして　33

第二部

草のことづて　43
この世は未知　53
歴史の中のある日の村を　66
いのちの歳時記はどこへ　69
あやはびら　72
わたしの筑豊　76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

遠い島　80
みそぎの渚　83
球磨川　94
水を呑む樹　96
蕾の紅　99
天崖のみなもとの藤　103
野の花一輪がひらくとき　105

第三部

雁さんへ——水俣から　115
高群逸枝のまなざし　132
「最後の人」覚え書　144
樹々たちのコロス　186
海のむこうのコーランボ　189
異人さん　206

八月の海の道　208
婆婆のかざりに　212
生き供養　216
秘話　220
ほんの少し知っていること　222
サングラス　228
桜の盛りに　231
ゆうひのジュリー　233

第四部

天の病む　241
ちいさな岬のこと　246
花帽子　252
十七年前のテレビ　271
生類共生の世界　275

後の世のために魚をとること　278
道づれ　283
桃太郎はどこに　287
まだ灯らぬ闇の中から　290
かなたの銀杏　293
やさしい若者たち　297
事はじめ・魂入れ　300

初稿発表覚え書

草のことづて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一部

日記から

未明の風

不知火海を中心に、この沿岸地帯を総合的な学術研究の対象にしてほしい、息のあるうちに、その事業の緒につく手がかりを得たいと寝てもさめても念願していた。それがどうも発足する模様である。

形の定まらぬ展望が雲の如くに湧き起こり、頭オカシクなっていないでしょうかと人にきいたりしていたが、遠野物語を読むことが出来て、われながら自分の衝動のよってくるところがふに落ちた。この衝動は、未生の世界との合わせ鏡のようなものだ。いまその世界をあらためて自分の背後にのぞきこむ。

水俣（不知火海沿岸）の内奥にとじこもり、高群逸枝を勉強しだしたりしていて、ようやっとこの書に対面したわけで、この感じは劇的である。ついに本を読めぬ一生かと思っていたのに失明しかけてのめぐりあい。嬉しくなり平家物語もちらっと読みかけぞくぞくしてしまう。世界は未知なるかな。無知なることのよろこび。

不知火海総合学術調査団。日高六郎、色川大吉、宇井純氏らから社会学第一班編成とのお便り。鶴見和子、菊地昌典、桜井徳太郎、山田慶児氏も御参加、生物班も動きつつあるとのこと嬉し。第一期のメド十年間。死ぬときは代わりの人見つけて死んで下さいと念願する。

水俣は東京から遠い。フランスやソビエトや、アメリカ、中国よりは遠い。遠いということはしかしおもしろい。遠いということはときどき遙かな人びとを呼び寄せる。

まだ春ならぬ未明の風がゴウと山のきわに立つ。ざんばらに乱れながら、風はいずこかに向けて立つ。

資料集

水俣市の広報課から、資料を整えたいから協力してほしい旨のハガキが来ているのを、郵便物の山の底から家人が見つけ出す。

長年にわたる市行政の、チッソと組んでの水俣病隠蔽工作のため、今日どれほどの犠牲者が出続けてやまないことか。その隠蔽工作の証拠資料の数々をも含めて、こちらは熊大法文学部の富樫貞夫助教授や社会学の丸山定巳助教授をチーフに頼んで研究会をつくり、資料集の大編さんをやっていただいている。資料集の構想を立てたのは、水俣病訴訟が提訴される前だからやがてもう十年近くになる。

水俣を表に出すのに、足尾鉱毒事件から学ぶことが多かった。ここをたどりゆく中で自分の水俣が私には見えて来た。足尾や谷中の研究者たちは多層にわたっていて、なお資料の厖大な埋蔵量のあることを予感させられた。木下尚江「田中正造の生涯」、島田宗三「田中正造翁余録」、林竹二先生の御研究など、読破するだけでも一生仕事である。渡良瀬川沿いにのぼり下りする先々に田村紀雄なる人の足跡が必ずあったが、氏の御著によって、未見の権力側資料にも接しうることになった。生きてこのことを待ったと共に、歴史の虚無のごときを感じて卒然とする。

先日の水俣病研究会で、

「大へんな仕事になってしまいましたよ」
と富樫先生が嘆息された。足尾の今日までの研究を見ればわかるように、並はずれた資質の方々の生涯をかけたお力をもってしてもいまだにその全貌はうかがい知れぬのである。わが両チーフは別として、素人の私どものかかわる仕事においてをや。

たのしみ

仏つくって魂を入れるということがある。

言葉というものも不思議なもので、これをあやつる作業につい身を入れていると、表現そのものが本人とは分離して、人格を持ってくる。これは虚構のための作品で、魂を入れてやったにすぎないと思っているうち、本人はふぬけになって、作品世界の方が、らしくなって生きてゆく。そこでわが身を離れた作品のあわれにほだされてなにやら義理を感じ出し、そちらの方におつとめをするようになるから文章書きというものは奇態なものである。そうこうしているうちにわが作品の中にどっぷりひきずりこまれ、虚構の生を生ききってしまう、ということもあるのだろう。

かような次第で、このごろにわかに人間というものに興味を持ち始め、ひそかにこれを観察するたのしみが生じて来た。これまで興味の最たるものは、自分自身であったけれども、霊長類の研究という学問があることにおもい至り、群れの集散とか、反りの合わぬ同士の出遭いとか、ボスの生態とかを人間に当てはめて考えていると、その習性がじつに原始的なパターンを持っていることに気づく。この生態を分類して、会ったかぎりの人びとを当てはめてみると、猿たちよりはしかつめらしく装飾的であるところがなんともいえぬ愛嬌で、おもしろくてたまらない。

ひそかにこれを集大成し、友人知人たちに思い当たってもらう節々をも入れておいて発表してみたらばと、意地悪などをされた夜にせっせと考える。

彫像家　ヒューケ氏

ヒューケ、という古代彫像家のことを知りたいのだが。と言ってもこの人物は夢の中に出て来たのだから、あとの続きを見なければ、たぶんわかるまいと思われる。

非常に晴れた空を持つ山岳民族の部落だった。空は岩山で区切られていて部落はのどかな午睡どき。わたしは旅行者である。めったに旅行できぬので、夢でよく外国にゆく。岩の間に丈の高くない樹木や草が生えているが、栄養不足でもないのは、適度な雨が、この山地にうるおっているのだろう。「永遠の刻」というのが古代のこの村落にとじこめられていて、わたしはその「刻」に逢うためにこの部落にはいったのである。すると、なんという運命の導きであろう、それがあらわれたのだ。

思いがけなくもそのとき、岩山の上の紺碧の中から、唐金で鋳た獅子の顔がわたしの方をのぞいたのである。それはスキタイ人たちの造ったような、のびやかな姿態の雄獅子だった。永遠の時刻がひらくと、部落の守護神であるこの鋳物の獅子が甦えるのである。部落は静かにねむり、わたしの胸はドキドキし、獅子がわたしの方にウインクめいた眸をみせ、しなやかに背中をくねらせて、一歩一歩下りてくる。なんとチャーミングな表情をした獅子なのだろう。

まあ、だれがこんな獅子を創ったの、ああ動く彫像ね！　まあ！　とわたしは連れのT少年に聞いた。彼は年若いくせわたしより博学なのである。

「うーん、記録にはないんですけれどねえ。ヒューケという人物です」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c